

参加レポート

第74回日本PTA全国研究大会

奈良大会

大会テーマ

建国の地 大和からの発信
コンヴィヴィアリティな「わ」
～挑戦するなら今しかない～

開催日

2026年 分科会 8月21日（金） 午後
全体会 8月22日（土） 午前

会場

分科会 奈良県内各地
全体会 天理大学杣之内第一体育館

日P奈良大会の大会要項は
奈良大会ホームページで
ダウンロードできます。



<https://zenkokutaikai74-nara-pta.com>

参加レポート 目次

- 1ページ目・・・ 表紙（本ページ）
- 2ページ目・・・ 分科会一覧
- 3ページ目・・・ 第1分科会
- 4ページ目・・・ 第2分科会
- 5ページ目・・・ 第4分科会
- 6ページ目・・・ 第6分科会
- 8ページ目・・・ 特別第1分科会
- 10ページ目・・・ 特別第2分科会
- 11ページ目・・・ 全体会 記念講演

分科会 領域	研究課題	会場
	基調講演者	
第1 家庭教育	Happy な毎日が子供の未来を開く ～親も子供も、笑顔で心が軽くなる学び～	王寺町文化福祉 センター
	木村 泰子氏 大阪市立大空小学校初代校長	
第2 学校教育	子楽しみながら考える力で豊かな学びを実現するには ～“湧く湧く”好奇心が学びを変える～	生駒市 たけまるホール
	上田 信行氏 同志社大学名誉教授	
第3 人権教育	ネット社会を生き抜くために、「禁止」よりも「共育」の視点を ～子供の権利とネット社会の“環”を考える～	御所市防災交流館 ミモーロ
	今井 善太郎氏 (株)Classroom Adventure 代表 掘家 由妃代氏 佛教大学教育学部 教授	
第4 地域連携	PTA って、けっこうすごい。未来創造作戦会議 ～家庭・学校・地域の本気の『輪』で、子供が本当に走り出す～	斑鳩町 いかるがホール
	高橋 剛志氏 マイスター高等学院神戸校 校長	
第5 今日的課題	みんなで育てる心の元気 ～ちょっと話そや！分かち合えば気持ちは軽くなる～	大和高田市 さざんかホール
	宮田 博文氏 金株株式会社宮田運輸 代表取締役会長 富永 良喜氏 兵庫教育大学 名誉教授	
第6 広報活動(防災)	こどもまんなか防災の“和” ～心の“和”・身体の“和”・つながりの“輪”～	川上村 やまぶきホール
	国崎 信江氏 危機管理教育研究所 代表	
特別第1 PTA のあり方 (日本 PTA 担当)	「PTA って、今も必要？」 ～”倭”の心から考える、これからの PTA～	橿原市 ロマントピア ホール
	安藤 大作氏 (株)安藤塾 代表取締役 元日本PTA全国協議会副会長	
特別第2 地域社会創生 (文部科学省担当)	学校を地域社会の学びと支え合いの拠点に ～世界に羽ばたく子供を育てるために地域の一員として PTA ができること～	天理市 市民会館 やまのバホール
	並河 健氏 天理市 市長	

第1分科会 「家庭教育」

基調講演 講師：木村泰子 氏 （大阪市立大空小学校初代校長）

演題：不登校ゼロ！奇跡の学校はこうして生まれた

講演では、障害や発達の特徴のある子供、不登校など、さまざまな状況にある子供たちが安心して過ごすためには、周囲の理解と環境づくりが大切だと学びました。

木村氏は、「子供本人を変えるのではなく、一人ひとりの個性や特性を理解し、周りが変わることで子供が生きやすくなる」とお話されていました。

また、障害名や状況だけで判断せず、かけがえのない命として受け止めることも重要だと感じました。学校・家庭・地域がつながり、互いの違いを認め、子供たちが自分らしく過ごせる環境をつくるのが、HAPPYな毎日と未来につながるのだと学びました。

スペシャルスピーチ

入江爽太さん（絵本作家、講演家 兵庫県三木市在住 中学生）によるスピーチが行われました。入江さんは、世界平和のために、パフォーマンスを通して全世界を笑顔にしたいと話されていました。

中でも特に私の心に残った言葉は「優しい言葉や笑顔で「心のだっこ」ができる」「命があること、笑い合えることは、とっても幸せなこと」です。

この言葉に込められた、子どもたちや世界中の人への思いを大切に、私自身も笑顔と優しさを広げていきたいと感じました。



第2分科会 「学校教育」

基調講演 講師：上田 信行 氏 （同志社女子大学名誉教授/
ネオミュージアム館長）

演題：『Playful Learning School』
～可能性を解き放て～

上田信行名誉教授の基調講演では、遊びながら学んでいく「プレイフルラーニング」を実際に体験するため、講演時間の中で歌を作ることになりました。参加者が1本のモールを様々な形に変えてお互いの体験や思いを語りあったり、実際に教授が以前に作った歌をみんなで歌ったりして、その動画を基にAIを使って歌が作られました。短時間の中で「can not（できない）」ではなく「not yet（まだできない、やればできる）」を体験できたことは、子どもたちに成功体験を植え付けることの大事さを学ぶことができました。

実践発表とパネルディスカッションでは、生駒市の教育改革や企業との協働の成果が報告されました。特に「海ごみ問題に関するプロジェクト」では海がない奈良県で育つ小中学生が、海のごみに興味を持ち、企業と協力して各地の小中学生と交流し、解決に向けた提案を考えていく過程が詳しく説明されました。学校教育だけではなく地域との協働で、子どもたちの興味や能力を引き出していた、素晴らしい取り組みだと思いました。

滋賀県でも「うみのこ」などの体験事業や地域の企業との協働は行われていますが、大人たちが頑張っている姿を子どもたちに見せながら、子どもたちの思いを実現していくための更なる取り組みが必要であると感じました。

第4分科会 「地域連携」

基調講演 講師：高橋剛志 氏

(マイスター高等学院神戸校校長（一社）マイスター育成協会 代表理事)

演題：全ての子供が社会で活躍できる新しい教育の在り方

講師の高橋剛志氏は、すべての子供たちが才能を開く新しい教育の在り方を示す学校を設立されたお話をされた。マイスター高等学院では提携企業で仕事の基礎を学ぶ。仕事の基礎を学びながらお給料も支払われ、高校卒業の資格も取得できる。卒業後も仕事の基礎を学んだ会社に就職でき就職後も子供たちのサポートをする学校である。

未来創造作戦会議パネルディスカッション

講演後にパネルディスカッションが行われた。パネリストの吉藤行二さん（教師）は、野外活動を中心に学校で出来ない体験ができる活動をされている。多田美砂さん（NPO 法人代表）は、学校と連携したフリースクールで年齢が異なる子供や大人と一緒に活動をしているお話をされ、浅野直美さん（元宮城県 PTA 連合会会長）は、役員だけが頑張る PTA→みんなで頑張る PTA 活動のお話、増田柑さん（U18 教育サミット主宰）は、子供たちは意外と考えている、どうありたいかを知っている。「押し付けずに、自分のやり方でやりたいことをさせてあげた小学生が伸びた」とのお話をされた。

地域×学校×保護者が連携するには、大人が変わり、地域が変わり、企業が変わる事が必要。大人がスル事を嫌がらず楽しむ姿を見せる事で子供たちも新しいことに挑戦し学ぶ楽しさを知ることが出来る。子供たちに授業では学べない多くの経験、体験をさせたいと想い、協力者を見つけること。人と人との繋がりで輪を広げていく。まずは、子供たち中心で考え行動することが大切である。



第6分科会 「防災・広報」

基調講演 講師：国崎信江 氏 （危機管理教育研究所 代表）

演題：子どもとともに学ぶ 災害を生き抜く力の高め方

氏は、熊本地震発生翌日から熊本入りしサポート活動をされ、この日も終了後熊本に戻れるとのこと。震度7の地震などは、「人生に1度遭うか遭わないか」という時代から、頻発・群発する時代に入ってきた。生死にかかわる時点のみならず、避難生活を続けなければならないこともある。この災害ありきの時代を生きていく子どもたちには、どんな力をつけていくべきか？を3点にまとめてお話された。

生き抜く力 ①何が起きるかを知る

能登半島地震発生時のドラレコに残された映像を2本拝聴した。どんなことが起きるのか？と、そこから学べる点は

- ・33秒で倒壊 ⇒ 耐震性のある家に住むこと
100万かけてでも耐震工事を 生きているうちに対策を
子どもは環境を自分で選べないから
- ・10秒で外に逃げろ！
- ・2階にいるなら そのまま留まれ！（1階は潰れる）
と 生命を守るために教えている
- ・裸足で逃げる ⇒ 避難所ではケガをして逃れてくる人が思いのほか多い
避難所運営ではケガの処置やケアができる備え・知識必要
- ・すさまじい土埃 ⇒ 「助けて」の声がかすれて出ないくらい
防犯ブザーや防災笛は有効 身近に置いておければ
- ・どこに住んでいても「津波が来る」という知識は必要
自宅地域は海がないから津波の心配はない だとしても
地震発生時自分や家族がどこにいるかは わからない

と話された。また、震度5では 固定していないものは全て動く、固定していなければそれ自体が凶器になることも実験画像から提示された。

子どもには 「～～しなさい」と言っても忘れてしまうから、「〇〇くんなら どうする？」と聞いて、子どもの考えを聞いたあとで、「私なら～～するかな」と話すようにしている。もしもの時、結果生き残ったらその行動がその人の正当になる。安易に答えを伝えない、考えさせろと話された。

生き抜く力 ②効果的な対策を知る

- 簡易なグッズで防災：・S字フックで開き戸の簡易ロックで中身の飛び出し防止
- ・キャスターのロックは 対角に閉めると効果あり
- ・段ボール箱を家具の上に積んで天井とのスキマをなくすだけでも効果あり

●防災の環境で子育て（国崎家の防災子育て）

- ・お金をかけてモノを増やさない 家にはほとんどモノを置かない
- ・ガラス製品や金属製のモノは買わない 子どもにも柔らかい素材の製品を選んでもらう（紙製・シリコン製・皮製 など）
- ・モノを増やさないことは節約にもつながる 不便な生活に慣れると被災時にも慌てない
- ・おうちDEキャンプ（訓練）のススメ（被災生活の疑似体験）
3～4時間でも（できれば半日）ガス・水道・電気を止める
いろんな体験をさせてあげることで、日頃の積み重ねが防災意識につながってきている
⇒ 被災を乗り越えていける 不便な環境変化に動じない

生き抜く力 ③最悪を考える

- ・災害に遭う事で一番心配なことは何か？と 子どもに聞くと
「両親と一緒にない時に被災するのはイヤ」と答えた
⇒ もしも被災しても子どもだけで行動しない 信頼できる大人と一緒に行動してもらう
「一緒に行動してもらえますか」と勇気を出して言えるよう 伝える
- ・公衆電話の使い方 一度使ってみる体験もアリ・・・案外子どもは知らない
災害用伝言ダイヤルの使い方 家族の誰の番号に伝言を集めるか？決めておく
- ・留守中、自分の代わりに自分の子どもを守ってくれる人 3人いるか？

●防災の知識は、3冊（できれば著作者がちがう）本を読めばだいたい基本は知れる

●国崎信江のキキカンリTV（YouTube）

実践発表とパネルディスカッションを通して

宇田直人氏 石川県PTA連合会前会長がお話された。

災害時「県Pで何ができるのか？ 何のために存在するのか？」を考えた。何もせねば、なくても困らない組織になる。そこで、ネットワークを活かそうと、義援金のための口座作成を日Pに依頼し、全国のPTAから寄せられた義援金を活用させてもらった。

行政では、予算化されていない、子どもだけに特化できない（平等性の観点）、生命に関わることではない、などの理由で実現できなかったり、時間がかかってしまう支援を、PTAが代わって実施した。

災害発生時の避難場所は学校、その間子どもたちの学びの場としての機能は止まる。奥能登では「集団避難」が実施され中学生7～8割が疎開した。まずは、この中学生を支援した。

PTAの義援金の使途：映画鑑賞会（映画代、交通費、食事、買い物）、北陸新幹線試乗、遠距離・交通規制等で通勤できない教職員の学校での居場所設定、プリンター・電子ピアノ等の備品、他 修学旅行費の支援 等。

県Pから「〇〇の支援をします！」というのではなく、「使途は問わず要望には全て応じる」というスタンスで支援活動を行なった。

特別第1分科会 「PTAのあり方」

基調講演 講師：安藤大作 氏 （(株)安藤塾 代表取締役
日本PTA全国協議会元副会長）

演題：絶対にPTAは必要！

・学校教育が抱える深刻な課題： 教員のなり手不足、勤務時間の過多、保護者対応への不安などにより、若手教員が2年以内に精神的理由で離職するケースが増えている。また、プールの耐久年数（50年）を迎えるなど学校施設の老朽化に伴う修理費用も自治体任せとなっており、大きな負担となっている。

・子どもの代弁者は誰なのか： 選挙権のない子どもたちの声を社会に届ける組織は、現状PTA以外にほぼありません。日本の子どもたちは諸外国に比べて自己肯定感が低い傾向にありますが、離島など限られた環境の中でも地域コミュニティが強く、助け合って生きる地域では自己肯定感や理不尽なことへの対応力が高いという実例が示されました。

・PTAの真の必要性： PTAが不要なのではなく、運営方法に課題があるだけです。「子どもの味方として、子どもの代弁者としてPTAは絶対に必要である」と力強く訴えられました。

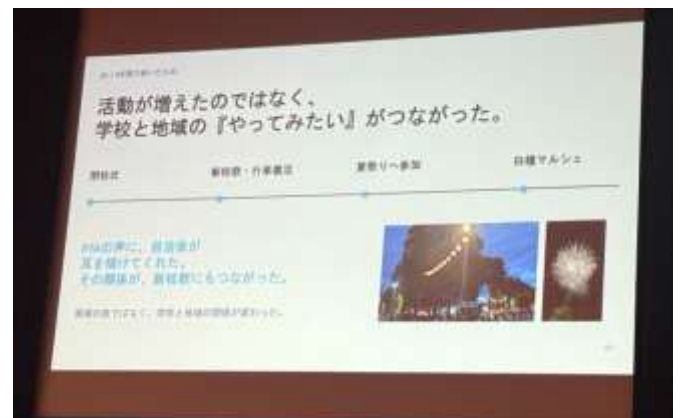


実践発表 発表者：小田 勝通 氏
（白樫校区 PTA 連合会 前会長）

・閉校が決まった中、「子どもたちが学校って楽しいと思えるPTAにしたい」という思いから活動をスタート。当初は「子どもたちのため」のつもりが、大人たちが夢中になって楽しむ姿が子どもたちの笑顔につながっていき

ました。

・「子どもを笑顔にしたい。じゃあその子どもたちの前にいる大人は楽しんで



いるか？」という問いかけのもと、1人ではできないことも「コンヴィヴィアル（自発的・共生的な喜び）」の精神でつながる大切さが語られました。「義務だから」「順番だから」「仕方なく」では活動は続きません。

パネルディスカッション

・行政とPTAの連携： 橿原市(奈良県)では、市PTA連と教育長との間で毎年秋に勉強会や要望書の受け渡しが行われており、トイレの洋式化などの学校環境整備が着実に進んでいます（現在改善率約50%）。佐賀県でも13市町PTA連の理事会で課題や成功例を共有し、実践へつなげる動きが紹介されました。

・日本PTA（日P）の役割： 「PTAなのに子ども不在の会議になっている」という批判がある一方、現場の声を文部科学省に直接届け、世論を形成していくためには県P連や日Pといった組織的なつながりが不可欠です。

○私の学びと気づき

今回の大会を通じて最も心に残ったのは、「PTAの本来の役割は、声なき子どもたちの代弁者であり、地域と学校をつなぐ架け橋である」という点です。日々の活動の中では、役員決めや行事の運営といった「作業」に追われ、「何のためにこれをしているんだろう」と負担に感じてしまうことも少なくありません。しかし、本当にPTAの助けや温かい手を必要としているのは、もしかすると普段PTAの輪の中にいない、一歩引いたところにいる子どもたちや保護者かもしれません。

○心に残った言葉

「この子どもたちの声ってどうやったら届くんだろうって思ったときに、誰か一人が聞いてくれて、それをちゃんとした力のある声に変えて、『あなたは一人じゃないんだよ、この地域には優しい大人がたくさんいるんだよ』と届けてあげる。これがPTAの大きな役目ではないか。」また、実践発表にあった「大人自身が楽しむこと（コンヴィヴィアル）」というキーワードも大きな気づきでした。やらされるPTAではなく、「こんなことやってみたい！」というワクワク感をつなげ合っていくことが、持続可能で温かいPTA活動の秘訣なのだと実感しました。

特別第2分科会 「地域社会創生」

基調講演 講師：並河 健 氏 （奈良県天理市 市長）

演題：「統廃合しない。先生が辞めない。」

『こどもまんなか』の学校・地域づくり」

天理市は、少子化のなかでも学校の統廃合を選ばず、「学校三部制」に取り組んでおられます。第一部は授業、第二部は学童など放課後の活動、第三部は地域の学び。学校を機能で三つに分け、公民館と複合化しながら、地域にひらいていく試みです。学童保育は校舎内に置き、新たな施設をつくらずに待機児童ゼロを実現されたと同じでした。

なにより心に残ったのは、学校を「ひらく」前に、先生方の負担を先に取り除いておられたことです。保護者からの相談を学校任せにせず、心理士や元校長などの専門チームが受ける窓口を設けられました。その結果、前年度に6名だった退職が1名に、8名だった休職が2名に減ったといいます。

並河市長の言葉が、忘れられません。

「余白をつかってあげれば、そもそも子どもたちのために人生をかけたいと思って教職を選んだ人たちなんです。その人たちの目の輝きを取り戻せるかどうか、子どもたちの輝きを取り戻すうえで、とても大事だ」

先生を支えることが、そのまま子どもを支えることになる。私たち PTA にできることも、きっとそこにあると感じました。



全体会 記念講演

記念講演 講師：小名木 善行 氏 （日本の歴史と文化の本質を広く伝える活動に従事）

演題：日本の心をつなぐ『和』の力

～建国の地・大和から未来へ～

『わ』でつながる未来 ～家庭・学校・地域の共鳴～

古典の文言を紹介されながら、古き時代から日本人が思いやりを大切にする心は培われてきたと話されました。

思いやりを大切にすることは日本人の誇りである。「和を以て貴しとなす」（十七条憲法）は、平和や協調を大切にする、様々な考えをチームで話し合うこと、一人一人の意見を大切にするものであり、日本人が大事にしながら、長い歴史を経てもなお現在まで受け継がれている。

人が人を思いやることは子育てにも必要不可欠なことである。子どもたちに関わる全ての人々が、子どもたちを思いやること、子どもたちの意見や思いを尊重することで、家庭のみならず地域を巻き込んだ子育ての『わ』となり、未来の地域づくりに繋がる。

また、相手の立場に立って考えることが子育てにとって大きな意味を持つ。観測点を動かすこと、自分だけを世界の中心にしない、相手の立場で見る、過去から現在を見る、未来から今日を見ることで、子どもたちと向き合う心に余裕ができるからだ。小名木氏が語られる子育ての重要ポイントは、『わ』を尊ぶ心とともに日本人が受け継いできたことなのだと感じました。

そして、歴史を学ぶ意義について、史実に基づいて自分の頭で考える学びが主体的な理解に繋がると言及されました。国づくりの原点にあった思いを知ることで、誰もが豊かに安心して安全に暮らせ、よろこびあふれる楽しい国にしていくことに繋がると感じました。

